1人の少女の心変わり

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１人の少女の心変わり

【Ｎコード】
Ｎ１８３７Ｅ

【作者名】
ユーリ

【あらすじ】
ながされて藍蘭島・１２巻のオマケから後日談として考えた話。
１人の少女が、ひょんな事がキッカケである少年に好意を寄せるようになる・・・

（前書き）

この話は、ながされて藍蘭島１２巻のオマケより派生した話です。
楽しんでいただけたら幸いです。

ここは日本から隔絶された島、藍蘭島。

女の子ばかり（1人だけ男の子がいる）が住んでいる、不思議な島なのである。

今この島で、1人の女の子が2人の女の子に追いかけられていた。

追われている少女の名は、みこと。

忍びの家系に生まれたものの、大工職人のりん目当てで彼女の家に弟子入りした、エロオヤジ気質がある娘である。

一方、みことを追いかけている2人の少女の名はくないとしのぶ。

くないは藍蘭島の学校で先生をしている1人で、まちとは小さい頃からの友人である娘だ。

しのぶはぬし達から行人のウワサを聞きつけ彼に勝負を挑んだが敗北し（胸をつかまれて）、代わりに行人に弟子入りした、侍大好きな娘である。

なぜみことがくないとしのぶに追いかけられているのかというと、みことがある一言を言ったのがキッカケなのだ。

『ウチはピンがええねん』

この一言である。

くないとしのぶ、みことのセリフを『ボケがしたい』と勘違いしたらしく、2人一緒に突っ込み役になろうと考えたのだ。

そんなワケで、みことはハリセンを持ったくないとしのぶに追われているのである。

「何でやね～ん！！」

くないとしのぶはハリセンを振り回しながら、みことを追いかけ回している。

「姉やん達ええ加減に止め～！！いくらウチでも体力保たんわ～！！」

みことは必死に逃げていた。

「みことは～ん、そろそろ諦めて・・・」

「拙者らの突っ込みを喰らうが良いでござる！」

「そやからそれがイヤや言うてるやろ～！！」

みことは必死に走るが、さすがに体力が尽きてきた。

「ハァハァ・・・（アカン・・・このままやと捕まってまう！どないしょ！？そ、そや！確か、この先に・・・）」

みことは決心すると、一気に速度を上げた。

「あっ！みーやん速度上げたでござる！」

「引き離す気やな・・・気ぃ抜かんと追うで！！」

「承知！！」

くないとしのぶは、見失わないように追い続けた。

1人の少年が、部屋で本を読みながら寝ころんでいた。

彼の名は、東方院行人（トウホウイン イクト）。

女の子ばかりのこの島に流れ着いた、ただ1人の男の子である。

「フゥ、相変わらず紅夜叉シリーズは面白いなぁ。またちかげさんに借りに行かなきゃな。」

行くとが本を読みながら笑みを浮かべていると、ドアがいきなりガラッと開いた。

ガラッ！

ドアを開けたのは、みことだった。

「みこと？一体何しに・・・」

行人が言い終わる前に、みことは家の中に入って来た。

「た、助けて！行人はん！！」

「助けてって、一体どうしたの？」

「今姉やん達に追われてんねん！匿って！！」

行人は迷ったが、みことを風呂場に案内し、自分は玄関で待った。

しばらくして、くないとしのぶがやって来た。

ガラッ！

「あ、師匠～♪」

「行人はん、ここにみーやんが来てはらへんか？」

「みーやんって、みことの事ですか・・・？」

行人は後ろをチラリと見たが、すぐに前に振り返った。

「いえ、彼女はここに来ていませんよ。」

行人はサラッと言った。

「そうか。ほな、見かけたら捕まえて連絡してくれや。」

「わかりました。」

「では、またでござる師匠♪」

そう言うと、くないとしのぶは煙幕と共に消えた。

ボンッ！

「ぶわっ・・・ゲホゲホ・・・」

行人がセキをすると、後ろからみことの声が聞こえてきた。

「行人はん、スマンな。ウソついてもろて。」

「ハハハ、まぁ慣れてるし・・・それにしても、何でみことくないさんとしのぶに追われてたの？」

行人は素っ気なく聞いた。

「えっと、実は・・・」

みことから事情を聞いた行人は、目が点になった。

「そんな事で2人に追い回されてたのか、君は。」

「ハ、ハハ・・・姉やん達天然のボケキャラやさかいな・・・」

みことは苦笑いしている。

「ハハハ・・・」

行人も苦笑いをした。

「ところで行人はん、１つ聞いてええか？」

「何だい？」

行人はみことに聞いた。

「何でウチを匿ってくれたん？」

「へ？」

行人はキョトンとした。

「そりゃ、君が匿ってくれて言うから・・・」

「それもそうやけど・・・ウチ今まで行人はんにヒドイ事ばっかしてきたやんか？てっきり匿ってくれへんと思ってたから・・・」

みことの言葉を聞いた行人は、ハァとため息をつきながら答えた。

「当たり前じゃないか、そんなの・・・みことは女の子なんだから。」

「ほぇ！？」

行人の言葉に、みことはドキッとした。

「お、女の子って行人はん・・・ウチ、散々アンタに乱暴したんやで？それに、りん姉様やすずっち達の尻や胸追い回してばかりで、まるでオヤジやん？そう思わへんの？」

「うん、まぁ確かに普通の女の子とはちょっとちがう趣味だけど・・・みことは充分女の子だよ。カワイイ・・・ね。」

「カ、カワイイ!?」

行人のその言葉に、みことは顔が赤くなった。

「さ、さよか・・・」

カァァァァ・・・

「ほ、ほな行人はん・・・ウチ、もう帰るわ・・・」

みことはモジモジしながら言った。

「あ、うん。気をつけて帰るんだよ?」

「ほ、ほなまたな?行人はん・・・」

「またね、みこと。」

行人に見送られ、みことは顔を赤くしながら帰路に着いた。

帰り道、みことは赤面しながら歩いていた。

「あんな事言われたん、生まれて初めてやわ・・・何でやろ?今日の行人はん、少し格好良く見えたかも・・・」

みことは余韻に浸っていた。

そのせいもあったのか、彼女は背後から近づいてくる影に気づかなかった。

そして次の瞬間、みことは肩を捕まれた。

ガシッ！

「へ？」

みことの肩をつかんだのは、彼女を追い回していたしのぶだった。

「やっと捕まえたでござるよ、みーやん。」

「し、しの姉ぇ・・・・」

その横にくないもいる。

「もう逃げられへんなぁ、みことはん？」

「く、くない姉やんまで・・・・しもた、追われてる事すっかり忘れとった・・・・」

みことの顔は青ざめた。

「さて、みことはん。」

「拙者らの愛の突っ込みを受けるでござる！」

「イヤや言うてんのに～！！」

哀れ、みことは縄で縛られた状態でくない達に引きずられて行った。

その夜

みことは布団の中で、行人の言った事を思い出していた。

『みことは充分女の子だよ。カワイイ・・・ね。』

「ウチが、カワイイて・・・」

みことは顔が赤くなっていく。

「なぁ、行人はん・・・迷惑でないんなら、ウチもアンタに想い寄せてええですか・・・？」

みことはそう呟きながら、眠りに落ちた。

余談だが、この翌日から行人争奪戦にみことが加わったのは言うまでもない・・・

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1837e/

１人の少女の心変わり

2010年10月11日16時57分発行